

新年のご挨拶

宮城県医師会会長 佐藤 和 宏



明けましておめでとうございます。昨年は、令和2年度から引き続き、新型コロナウイルス感染症に翻弄された1年間でした。殊に8月にピークを迎えた第5波では、1日の新規感染者数の最大値が25,992人となり、入院させたくてもできず、自宅で亡くなる方が出てしまうという、まさに医療崩壊が起きました。

現代の我が国で、このような事態が医療現場で起こることは全く予想されないことでした。私たち医療関係者はもとより、政府、行政等あらゆる関係者が一丸となって、今後の教訓とすべき事態です。前首相は、国民の開催反対の声があつたにもかかわらず、東京オリンピック・パラリンピックを強行し、緊急事態宣言中の開催という異例の事態になりました。また8月初めには「入院は重症者を主として、それ以外は自宅療養を原則とする」と発言して物議を醸しました。それらのことが重なって前首相の支持率は低下し、2回目の自民党総裁選挙には不出馬を余儀なくされました。首相の不出馬が、自民党にとって党勢回復のきっかけとなったことは、皮肉な結果です。しかし、政治に対する国民の怒りは、相当なものだったと記憶しています。

一方で私たち医療関係者、殊に病院関係者にも批判の矛先が向けられました。詳細は割愛しますが、いわれのない批判には、きちんと理論武装して反撃すべきです。そもそも平時の診療報酬では、病院に対して冷淡な対応を取っておきながら、有事には過剰な期待をされても困惑します。平時から、病院設備や人的配置に余裕がなければ有事には有効に動きません。ICUのベッド数やそこに働く医師や看護師の配置や待遇の改善も必要です。ポストコロナの時代には、さらに厳しい目が病院、殊に民間中小病院へ向けられる可能性もあります。病院のみならず保健所もそうですが、平時の効率化、病床削減、保健所機能の縮小がどのような結果を招くかは、今回のコロナ禍が明らかに示しています。

開業医や日本医師会にも批判がありました。しかしながら、開業医が頑張ったからコロナワクチン接種が進んだ事実は否めません。また、診療検査医療機関は、感染のリスクもありながら、検体採取を行いPCR検査に寄与しました。宮城県医師会健康センターではPCR検査を精力的に行い、検査総数は5万6千件以上となっています(2020年10月末現在)。さらに9月中旬には、全自動型の検査器械を導入し、10月から稼働しています。現在、第6波の可能性が言われていますが、経口治療薬が承認されれば、ますます開業医の役割は重要となります。ただし2類から5類への転換は、慎重を期するべきだと思います。コロナは、様々な分断を私たち医療従事者にももたらしました。今後は時間をかけて、その修復も必要です。

今年も、新年の挨拶にはふさわしくない、暗い話になりました。私たちは、ワクチン接種の更なる促進(3回目接種など)や経口治療薬、抗体カクテル療法などの使用による治療、重症化の予防など、1年前よりはコロナと闘う武器を確実に手に入れています。これらを駆使して、早く以前のあたりまえの生活を取りもどしたいと心から思います。

今年こそコロナから脱却して、会員の先生方と親しくご交誼賜りたいと願っております。宮城県医師会、宮城県医師会健康センター、宮城県医師会協同組合を引き続きよろしくお願い申し上げますと共に、先生方のますますのご健勝とご発展を祈念致します。